

# イタリア・サレント方言における不定詞に関する基礎的調査<sup>1</sup>

田中 慎吾

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 1. サレント方言の地理的分布

今回扱うサレント方言はイタリア東南部プーリア州の南部サレント地方で用いられる方言群であり、方言区分上はシチリア方言・南カラブリア方言とともに「最南方言群 (i dialetti meridionali estremi)」(Grassi C, Sobrero A.A, Telmon T, 2003) と呼ばれる方言グループにまとめられる方言である。

## 2. サレント方言の不定詞について

- (1) \*lu Karlu ole inire krai.  
il Carlo vuole venire domani (\*=ungrammatical)
- (2) lu Karlu ole ku bbene krai.  
il Carlo vuole che viene domani.

[Calabrese(1993)]

このようにサレント方言<sup>2</sup>は *volere* の補語に不定詞をとれないことで知られているが、形態論上不定詞それ自体が存在しないわけではない (Calabrese (1993))。

- (3) no pozzu turmiri.  
non posso dormire
- (4) mi fai muriri.  
mi fai morire. [Rohlfs(1969)]

<sup>1</sup> 本稿は平成17年3月15日東京外国語大学内で行った同名発表を元に加筆・修正を行ったものである。発表の際にコメントをいただいた先生方に感謝いたします。

<sup>2</sup> Calabrese (1993) はレッチエにおける調査を元にしているため、より正確にはレッチエ方言 (leccese) と呼ぶべきであろう。

Sobrero (2003) によると、サレント方言において不定詞は「わずかな場合でのみ、いくつかの特別な構造で使用する」のであり、使用するケースについてはおおよそ以下のことが言えるという。

- (ア) *volere, sapere, fare, lasciare* は不定詞をとらず、*cu* を補文標識として（落ちることもある）明示節をとる
- (イ) 地域によって(ア)の適用度合は異なる。*dovere (toccare がなければ)* や *bisognare* も明示節をとる
- (ウ) 南部ではその他の動詞や構造にも(ア)が適用されうる (*vedere, sentire, senza, per*)
- (エ) 南部より北部へ行くにしたがって不定詞の使用は一般化する

先行研究はこの方言での不定詞使用に関して *volere* のようないわば際立ったケースに注目しているため、全体像を把握することが難しい。そこで本稿では、どの程度、どのようなケースで不定詞が使用されているのか、コーパスを使った調査を行うことによって観察・整理してみたいと思う。

### 3. 資料体の選定

コーパスとしては Uccio Aloisi 『大地の色』 *I colori della terra* (2004) を使用した。これはサレントの伝統音楽の歌手・演奏家であり、南部の町 Cutrofiano 出身の Uccio Aloisi へのインタビュー (153 分) で、使用言語は主にサレント方言であり、部分的に地方的イタリア語 (*italiano regionale*<sup>3</sup>) も使用されている。使用されている言語の処理に関しては次節で扱う。

### 4. 方言の社会言語学的状況とコーパス研究の可能性

方言コーパス、とりわけ口語資料を使用するためには、イタリアにおける方言使用の社会言語学的状況をふまえる必要がある。イタリアは実質上地方的イタリア語と方言の二言語併用地域であり、サレントでは方言と地方的イタリア語のコード・スイッチングおよびコード・ミキシングが発話の中でかなり頻繁に起こる。そのため方言の同定が難しく、コーパス研究そのものの困難につながるといえる。一方でメリットとしては話者の直感から逸脱したものを捉えることができる可能性があることが挙げられるだろう。とはいえ実際、方言と地方的イタリア語をきれいに分けることはむずかしい。今回はひとまず、イタリア語と方言の区別をせずに該当する部分をすべて見た上で、形態を基準に方言とイタリア語

<sup>3</sup> 地方的イタリア語 (*italiano regionale*) とは、言語学者ペッレグリーニ Pellegrini が提唱したイタリアの言語使用の 4 つのバリエーションのうちの 1 つである。ペッレグリーニはイタリア語と方言に加え、その間にさらに 2 つのバリエーションがあるとした。その 1 つが地域的な特徴をもつイタリア語 (= 地域的イタリア語) である。

を分けることで処理することにし、さらに問題のあると思われる箇所に関してはコメントをつけることにした。なお、インタビュー中に歌われる歌の歌詞に関しては資料の均質性の点から除外した。

## 5. 調査

先行研究では、サレント方言の不定詞使用の少なさを述べる際に「イタリア語と比べて」不定詞の使用が少ないと主張しているように考えられる。これを踏まえて今回の調査ではイタリア語を基準にした上でサレント方言の不定詞の使用状況を調査することにする。

調査の順序としては、まず初めにイタリア語で不定詞をとる補助動詞・知覚動詞・使役動詞がサレント方言では明示節・非明示節<sup>4</sup> のいずれをとっているのかを観察し、続いてイタリア語で<Prep V-inf><sup>5</sup>を従える動詞句および形容詞句の場合を見る。その後、形容詞句または副詞句として用いられるイタリア語の<Prep V-inf>の処理を、そして次に名詞句・名詞節を作る場合の処理の仕方を見る。最後にその他で不定詞の出現するケースを見ることにする。

なお、見出し語にはすべてイタリア語を挙げてある。また、対照のためにグロスには対応するイタリア語を逐語的に当てた。

### 5-1. 補助動詞・知覚動詞・使役動詞

まず初めにイタリア語で不定詞をとりうる「補助動詞」(potere, sapere, volere, dovere)「知覚動詞」(sentire, vedere)<sup>6</sup>「使役動詞」(fare, lasciare)に関して不定詞の使用状況を調べた。

#### 5-1-1. 補助動詞

(5) potere V-inf      *putimu tirare nnanzi*  
                            possiamo tirare avanti

(6) sapere Comp V      *No sanne cu le fazzane cchiui!*  
                            Non sanno che le fanno più

*pecché quiddhu sacciu fazzu*  
                            perché quello so faccio

<sup>4</sup> 明示節は定動詞を用いる従属節を指し、非明示節とは不定詞、分詞、ジェルンディオなど動詞の不定法を用いる従属節のことを指す。

<sup>5</sup> 語の連続を記述するために<A B>の表記を用いる。これは語 A, B がこの順に連続して現れることを表すことをとする。また、本稿で用いた略号は V = Verbo (動詞), V-inf = verbo infinitivo (不定詞), Comp = complementatore (補文標識), Prep = preposizione (前置詞), N = nome (名詞)。

<sup>6</sup> 今回の資料体に出現した知覚動詞は以上の 2 動詞のみであった。

- V-inf      *se poi te la sapivi sbrigare.*  
               se puoi ti la sapevi sbrigare
- (7) volere    Comp V    *iu ulia cu mangiu*  
                   io volevo che mangio
- V            *no boju bau addhuieddhi!*  
               non voglio vado da nessuna parte
- V-inf      *Dicu, quasi te voju dire ca unu è beddu*  
               Dico, quasi ti voglio dire che uno è bello
- (8) dovere    V-inf      *devi essere educatu*  
               devi essere educato

表1 (括弧内は%, 小数点以下2桁切捨て)

	V-inf	Comp V	V	合計
(5) potere	37 (100)	0 ( 0)	0 ( 0)	37 (100)
(6) sapere	2 (14,2)	8 (57,1)	4 (28,5)	14 (100)
(7) volere	4 (10,0)	5 (12,5)	31 (77,5)	40 (100)
(8) dovere	11 (100)	0 ( 0)	0 ( 0)	11 (100)

Rohlf (1969) の示すように、補助動詞 *potere* は完全に不定詞を従える結果となった。一方で *sapere* は比較的明示節を用いるようにみえるが、不定詞の使用も許されるようである。また、*volere* が不定詞をとった例はいずれも *voju dire* (「つまり」の意) であり、これは1つの固定された定型表現として用いられていると考えることもできるので、留保したほうがよさそうである。そうだとするとその他の例はすべて明示節を使用しており、これは先行研究と結果が一致することになる。

*dovere* に関しては、全体で11例見られたが、いずれもイタリア語の語形を取り、これらに関してはイタリア語と判断するべきであると思われる<sup>7</sup>。一方で同じく義務性を表す表現としては *toccare* (Comp) V が用いられた (29例)。

- (9) *Tuccava fatichi na sciurnata*  
       toccava lavori una giornata

<sup>7</sup> なお、知人のサレント方言母語話者1名によると、「補助動詞 *dovere* は方言では使わない」とのコメントを得た。

### 5-1-2. 知覚動詞

- (10) sentire V-inf *Basta ca sentia cantar quiddhu*  
basta che sentiva cantare quello

- (11) vedere V-inf *me visciu venire unu*  
mi vedo venire uno

表 2

	V-inf	Comp V	V	合計
(10) sentire	2 (100)	0 ( 0)	0 ( 0)	2 (100)
(11) vedere	2 (100)	0 ( 0)	0 ( 0)	2 (100)

知覚動詞に関しては不定詞を取る例のみが見られた。

### 5-1-3. 使役動詞

- (12) fare Comp V *Magari faciane cu binca iddu, nussai?*  
magari fanno che vinca lui no?

V-inf *ve fazzu avire lu contributu*  
vi faccio avere il contributo.

- (13) lasciare V *lassa mangiane!*  
lascia mangiano

V-inf *lassame stare*  
lasciami stare

表 3

	V-inf	Comp V	V	合計
(12) fare	4 (50,0)	3 (37,5)	1 (12,5)	8 (100)
(13) lasciare	3 (60,0)	0 ( 0)	2 (40,0)	5 (100)

使役動詞に関しては、明示節・非明示節ともに取るケースが見られた。ただし *lasciare* に関しては、不定詞の使用は *lasciamo stare* (1 例) および *lascia perdere* (2 例) であるため、ともに固定された定型表現と捉えることもでき、留保が必要である。一方で *fare* は明示節・非明示節共に用いた例が見られた。

### 5-2. 動詞句・形容詞句

まず初めに動詞句<V Prep V-inf>の場合を見る。一般にこのタイプの動詞句にはどの例

までが動詞句と判断できるか微妙なケースもあるが、ここでは資料中に現れたものでかつ慣例上ひとまとまりと判断なされるものについて取り上げた。

- (14) andare a V-inf      *va' a criscere un porco*  
                                   *va' a crescere un porco*

- V-inf      *va finire a mmale*  
                           *va finire a male*

- Comp V      *Vae cu balla*  
                           *va che balla*

- V      *scia coji tabbaccu!*  
                           *vai prendi tabacco*

- (15) venire a V-inf      *simu venuti a ffare*  
                                   *siamo venuti a fare*

- Comp V      *bieni cu nfilu tabbaccu*  
                           *vieni che infili tabacco*

- V      *stasera vegnu te piju*  
                           *stasera vengo ti piglio*

表 4

	Prep V-inf	Comp V	V	合計
(14) andare	1 (2,5)	14 (35,0)	25 (62,5)	40 (100)
(15) venire	1 (16,6)	2 (33,3)	3 (50,0)	6 (100)

andare に関しては上の表 4 に挙げた andare a V-inf, andare (Comp) V の他に andare V-inf も 3 例見られたが、これらはいずれも形態上地方的イタリア語と判断すべきものと思われた。また、a V-inf が後続するケース (1 例) もこれと同様に考えられた。また、venire に関しても、やはり明示節をとる例が見られた。

さらに、これ以外でもそれぞれ 1 例ずつではあったが、イタリア語とは異なって明示節を選択している例が見られた。(fare a V-inf → fare Comp V, fare di V-inf → fare Comp V, mettersi di V-inf → mettersi V, riuscire a V-inf → riuscire V, cominciare a V-inf → cominciare

### Comp V<sup>8</sup>

また、イタリア語で *mandare* のように <N a V-inf> を従えるタイプの動詞においても、不定詞を従えるケースは見られず、一方の明示節を用いて表された (*mandare, insegnare*)。

(16) *ma mandau sirema cu lu panaru cu coju rumatu de manzu la via.*

mi mandava mio padre con il paniere che prendo retame di mezzo la via

(17) *t'ha mparatu cu lu soni*

t'ha insegnato che lo suoni

以上のように、概して明示節の広がりを見せた。しかし一方で比較的不定詞をとる動詞も見られた。

(18) *ziccare a V-inf zziccamme a zzappare*

cominciammo a zappare

*V-inf ziccava menare stornelli*

cominciava cantare stornelli

Comp V *zicca ca ddaventa rompiscatole, no?*

comincia che diventa rompiscatole, no

表 5

	Prep V-inf	V-inf	Comp V	合計
(18) <i>ziccare</i>	5 (35,7)	7 (50,0)	2 (14,2)	14 (100)

「～を始める」を意味する *ziccare* は先の例に反して <(Prep) V-inf> をとった。今回の調査では不定詞を比較的とったのはこの動詞のみであったが、今後の研究ではこれ以外にも同様の例が見つかる可能性もありうるだろう。

次に、形容詞が明示節・非明示節を従える場合を見る。ここでもやはり明示節の使用の広がりが見られた。*(degno* は 1 例のみ)

(19) *essere capace V non era capace fazzu nienti addhu.*

non ero capace faccio niente altro.

(20) *essere degno V no su degnu cu lu nominu*

non sono degno che lo nomino

<sup>8</sup> *cominciare* に関しては <Prep V-inf> をとるケースも 1 例見られた。

表 6

	Pre V-inf	Comp V	V	合計
(19) <i>capace</i>	1 (20,0)	0 (0)	4 (80,0)	5 (100)

*capace* が前置詞を従える 1 例のケースは (21) であり、イタリア語へコード・スイッチングされている箇所と考えられる。よって 4 例とも明示節をとったと考える。

- (21) *pecché quello che fai tu io son capace di farlo*

以上のように形容詞に後続する場合においても、<Prep V-inf>は避けられる傾向が見られた。一方の不定詞を選択するケースは、ここでは 1 例も見られなかった。

### 5-3. <Prep V-inf> <Prep Comp V>

ここでは、前置詞が明示節・非明示節を従える場合（ただし、動詞句の一部としての使用を除く）を観察した。

はじめに前置詞 *senza*, *prima* についてみるが、これら 2 つの前置詞は、イタリア語では前置詞の従える不定詞の主語が文主語と一致する場合に不定詞をとり、主語が異なる場合に明示節をとる。ここでは前者の、主語の一一致した場合、すなわちイタリア語で不定詞を選択する場合を観察した。

- (22) *senza Comp V*      *me lu lassava tre, quattro misi senza cu lu toccu*  
                                     me lo lasciavo tre quattro mesi senza che lo tocco

- (23) *prima Comp V*      *era stato meju se iane mortu cinquant'anni prima cu nascune*  
                                     era stato meglio se hanno morto cinquant'anni prima che nascono

表 7

	V-inf	Comp V	V	合計
(22) <i>senza</i>	0 (0)	2 (100)	0 (0)	2 (100)
(23) <i>prima</i>	0 (0)	4 (100)	0 (0)	4 (100)

以上のようにイタリア語と異なって不定詞をとらず、明示節を選択している例が見られた。

今見た 2 つの前置詞は、イタリア語では主語の相違に応じて明示節と非明示節の使い分けを行うが、それと異なり<Prep V-inf>のみをとる（明示節はとらない）前置詞 *per*, *di* に關しても眺めることにする。

- (24) per V-inf                    Na fiata la facivi, pe' chiantare le vigne  
                                       una volta la facevi per piantare le vigne

まず *per* に関して <*per V-inf*> は 18 例見られたが、その内訳は、(24) 以外は *per dire* (11 例) および *tanto per (in)cominciare* (6 例) であった。これらは、それぞれ「いわば」「はじめに」といった定型表現と考えられるため、それを除くと非明示節の使用はほとんどなかつたと言える。一方イタリア語で <*per V-inf*> に当たる表現は、この方言では (25) のように明示節を用いて表していると考えられる。

- (25) Cu rrivi alle mie tucca nasci ntorna!  
                                       che arrivi alle mie tocca nasci daccapo

次に *di* についてだが、ここではイタリア語で名詞を限定・修飾する <*di V-inf*> を用いる場合にも明示節が出現するケースが見られた。

- (26) *te* vene tutta sta voglia cu canti  
                                       *ti* viene tutta sta voglia che canti

しかしこのような *di* に関してはイタリア語同様 <*di V-inf*> が用いられるケースも見られた。

- (27) quatru manere de faticare cu la zappa  
                                       quattro maniere di lavorare con la zappa

なお、以上の他にも、*a* (2 例)・*da*・*nel*・*al* (それぞれ 1 例) に不定詞が後続するケースが見られた。

#### 5-4. 名詞句・名詞節

不定詞により名詞句をつくるか明示節によって名詞節をつくるかを見る。ここではイタリア語との対照の点から次の例を挙げる。

- (28) piacere cu V            *ni* piacia cu balla  
                                       gli piaceva che balla

表 8

	V-inf	Comp V	V	合計
(28) piacere	0 (0)	3 (100)	0 (0)	3 (100)

piacere はイタリア語では不定詞句をとり、明示節では

- (29) ?? gli piaceva che balla.

となり、ここにおいても明示節の使用の広がりを見ることができる。

また、これはイタリア語では明示節・非明示節ともに可能であるが、明示節を用いて名詞節をつくる

- (30) *cu rrivi li mei è difficile!*  
che arrivi li miei è difficile

のようなケースは見られたが、一方の不定詞句を名詞句として使用するケースは1例も見られなかった。

### 5-5. その他の不定詞の使用

最後にその他の点で不定詞が使用されたケースを見ることにする。

- (31) *no me fare chiù ste figure*  
non mi fare più sta figura

- (32) *A ce ora aggiu benire cramatina?*  
A che ora ho venire domattina?

(31) は否定命令、(32) は義務を表しているが、この2つに関してはいずれの例も（それぞれ6例、46例）不定詞をとった。このように、明示節の使用が一例も見られないケースも見られた。

## 6. おわりに

以上で見てきたことから、先行研究で言われているようにサレント方言においては概して明示節の使用の広がりが見えることが裏付けされた。また、あまり言われてきていないことであるが、動詞句や名詞句を作る場合にも明示節をとるケースが見られた。逆に一方で、*ziecare* のように不定詞が比較的用いられるケースがあることもわかった。また、今回はそこまでは踏み込めなかったものの、明示節の広がりにも文法特徴に応じてその強弱があるようなことも推測可能だった。この点に関しては今後の研究課題の1つになるだろう。

今回は不定詞の使用について、テキストを通していわばパノラマ的に収集し整理してみたが、コーパスの総量が大きくないこともあり、サンプルの数も当然少なくならざるを得なかつた。ここで現れたケースを踏み台にして今後の研究につないでいく必要がある。ま

た、ここであらわれた諸特徴を方言の構造全体の中でどのように捉えていくのか、今回の調査を元に今後の研究をすすめていきたい。

## 資料体

UCCIO ALOISI 2004: *I colori della terra*, Edizione Aramirè, Lecce.

## 参考文献

秋山余思 1992: 「南イタリアにおけるギリシア的統辞法」『イタリア語ことばの諸相』, イタリア書房

泉井久之助 1968: 『ヨーロッパの言語』, 岩波新書

Calabrese A 1993: *The sentential complementation of salentino: A study of a language without infinitival clauses in Syntactic theory and the dialects of Italy*, Rosenberg&Sellier, Torino.

Grassi C, Sobrero A.A, Telmon A 2003: *Introduzione alla dialettologia italiana*, Editori Laterza, Gius.

Renzi, L., Salvi G 1991: *Grande grammatica di consultazione volume II. I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, Bologna, il Mulino.

Rohlf, Gerhard 1969: *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti sintassi e formazione delle parole*, Einaudi, Torino.

Rohlf, Gerhard 1975: *Vocabolario dei dialetti salentini (Terra d'Otranto)*, Congedo Editore, Galatina.

Sobrero, A.A, Tempesta I 2000: *Puglia*, Editori Laterza, Roma-Bari.